

ブックエッセイ

経済発展の謎に迫る試み

浅沼 信爾

元一橋大学国際・公共政策大学院教授

Stefan Dercon, *Gambling on Development: Why Some Countries Win and Others Lose*, 2022, Hurst & Company

経済発展の謎

昨年5月にステファン・ダーコンが『発展に賭ける：なぜ発展の賭けに勝つ国と負ける国があるのか』という誘惑するような題名の本を出版した。もちろんその本を読んでもよいと思ったのは、題名だけではない。彼の肩書が示唆する経験の豊富さが、この本には何か貴重なものがあるに違いないと思わせたからでもある。著者のステファン・ダーコンは、現在オックスフォード大学のブラバトニック政治学院および経済学部で経済政策を教えているが、もともとはテクノクラートの実務家で、最近廃止された英国の国際開発省（DFID）のチーフ・エコノミストや、外務大臣の開発政策アドバイザーを務めたという経歴がある。本人も本書の中で語っているように、数多くの途上国を訪れ、国の政権の政策担当者と話をする中で、ちょっと大げさに聞こえるかも知れないが、経済発展の謎に対する答えを見つけたようだ。

何時も思うことだが、経済発展の動因を探るのは玉ねぎの皮をむく作業に似ている。最初の皮を剥くと、次の層の皮が現れる。そしてその作業を続けるうちに、研究の結果得られた答えはどんどん現実から離れて抽象的になって、例えば政策対応といった現実問題にどう応用すればよいかわからなくなる。¹ 今日の夕食は何にするかという質問に、人生いかに生きるべきかという問題設定で答えるようなものだ。その意味で、わたくしは、この実務経験の長い著者が経済発展の謎にどのような答えを、玉ねぎのどの層まで剥いて出したかに大いに興味があった。

本書は400ページ近い大著だが、彼が経済発展の謎に対する答えと称する主張は、至極簡単でかつ明快だ。どの国にでもいわゆる経済・政治を支配するエリート層が存在する。産業界のリーダーたち、政治家グループ、軍の指導者たち、それに学者やジャーナリストといったインテリ層、労働運動指導者などもエリート層に含まれる。当然のことに国によってその組み合わせには違いがあるが、要するに社会・経済に関する政策決定を左右する立場にある人たちの総称だ。民主的か権威主義的かを問わず、どのような政治的

¹ 例えば日本の歴史的な経済発展については、わたくしの尊敬する寺西重郎一橋大学名誉教授の手になる『日本資本主義経済史：文化と制度』（2022年、勁草書房）という高著があるが、これは殆ど玉ねぎの中心部に迫る研究だ。経済発展の一番底の根にある文化がその動因になることを論じた研究だ。

レジームにもそのようなエリートが存在する。彼らの権力の源は、このようなエリート間の権力と資源の配分に関する暗黙の社会契約 (bargain) だ。この闇の契約は、いわば連立政権下での政党間の政策協定のようなもので、経済成長と発展がその政策協定の目標となって重要視されると俄然経済発展が実現する可能性が大きくなる。もちろん、エリート層がその目的に深くコミットしていなければいけないし、さらにその目的のために国家権力を行使する必要がある。しかし、政府の介入については、その時の政府の政策能力を超えるような過剰介入は避けなければいけないし、同時に政策の間違いから学び、政策の軌道修正をする実践的な意思と能力が必要だ。エリート層にとっては経済発展にコミットすることは賭けだ。今確実に手に入る短期的な利益と可能性として将来手に入るだろう経済発展による利益のトレードオフを見比べて、不確定な将来の利益を選ぶという賭けだ。

制度経済学の議論

これがダーコンの主張の核心だが、それについて誰もが想起するのは、開発独裁、クローニー・キャピタリズム (政商財閥資本主義)、国家資本主義等々の、開発の代償として汚職、差別、抑圧、資源の呪いをもたらすような経済発展だ。その意味でダーコンの発展理論 (それが理論であればだが) は、何ら目新しくないと思われるかも知れない。しかし、ダーコンの言っていることが本当に目新しいかどうかは、現時点で開発経済学が経済発展をどのように理解しているかを思い起こし、その文脈で判断する必要がある。

開発経済学が到達した現時点を一口で言い表すのは不可能だが、無理をして要約すると次のようになる。経済発展のためには投資と技術進歩が必要だが、そのためには私的な財産保有権を保証するような法的体制を含む各種の市場の整備が欠かせない。株式会社制度、銀行制度、資本市場、商取引法等々の制度のほかにも、エネルギー・運輸・通信等のハード・インフラストラクチャーの構築も、保健や教育といった公共財の供給も政府の責任だ。これらを政府の制度構築の責任と呼ぶならば、その他にも政府の責任としてこうして出来上がった経済社会を統治する責任と、運営する責任、すなわち経済発展戦略と政策の形成と実施の責任がある。すなわち、「投資と技術革新の促進」→「それを促進する制度と政策 (インフラを含む)」→「制度改革と既得権益の壁」→「改革の実効性を決める政治体制 (ガバナンスシステム)」の順に玉ねぎの皮を剥いてきたのだ。この一般的な文脈で、例えばダロン・アジェモールとジェームス・ロビンソンは、投資と技術革新に最も効率的な制度構築と政策実施ができるかどうかは、その国の政治制度 (これは権力構造と読み替えても良い) の性格による、と論じている。² すなわち、それが絶対主義的なもので、権力者階級にだけの利益のために経済を搾取するよう

² Daron Acemoglu and James Robinson, *Why Nations Fail: The Origins of Power, Prosperity, and Poverty*, 2012, Crown Publishers. (鬼沢忍訳『国家はなぜ衰退するのか』上・下、2013年、早川書房) Acemoglu はトルコ名で、アセモグルと書かれることが多いが、トルコ語発音ではアジェモール。

な「搾取的な政治機構 (extractive political institutions)」のもとでは、投資も新しい技術の導入も手控えられる反面、すべての権力グループに開かれた「包摂的な経済体制 (inclusive economic institutions)」のもとでは、すべての権力グループの利益を平等に扱う法の支配が確立されるし、私有財産の保護も保証される。このような体制の下で、投資と技術進歩が促進され、経済は発展する。単純化されているが、これが制度経済学的観点からの経済開発論の到達地点だ。

ダーコンの主張

では、ダーコンの主張のどこが新しいか。これまでの制度経済学の議論では、政治制度あるいは権力構造の形態を問題として来たけれども、どのような制度にしる、そこで展開される実際の政治と政治力学そのものを真剣に見つめてこなかった。われわれが問題としている絶対的な貧困からの脱出に必要なのは、大雑把に言って四半世紀にわたる平均7%程度のGDP成長で事足りるわけで、結果として経済規模が5倍くらいになった時点で、絶対的貧困からは脱出していると考えられる。そのために必要なエリート層の間の社会契約は、一世代持続すれば良い。制度的な変革がなくとも、エリート・グループが持つ政治や政策を変える力（これを著者は agency という言葉で表している）は大きい。その間の政治力学がどのように働くかで経済発展の進み具合が決まってくる。となると、政治の制度的枠組みを議論する前に政治の現実を議論する必要がある。多数の途上国の現状を見てみると、政治力学そのものの方が、政治体制や統治システム、あるいは経済体制や制度よりも経済発展に対してより大きなインパクトを持つように思われる。政治の箱より中身が問題なのだ。これがダーコンの視点で、その考えは、(ダーコン自身は中国の経験から学んだと述べているが) エリート間契約に基づく経済発展の成功の例としてエチオピア、ルワンダ、バングラデシュ、逆のケースとして DRC (コンゴ) やナイジェリアをモデルにしているようだ。

このような経済発展の見方は、直観に訴えてくる力を持っている。なんとなく既視感(デジャビュ)を感じる議論だし、現実には従来の制度経済学的な発展理論では特殊な例外の部類に属する事例が、中国やベトナム、バングラデシュ、そしてエチオピアやルワンダと数多く見受けられるからだ。これらの国の発展の経験は、しばしば「ルールを確認する例外 (an exception that confirms the rule)」として扱われてきたが、ダーコンはその論理をひっくり返して、むしろこうした特殊例外ケースが一般論なのだと言っているのだ。現実がその正しさを証明してくれているというわけだ。

ダーコン批判

しかし、『発展に賭ける』については大いに毀誉褒貶が予想される。わたくしはすでにあちこちに出回っているこの本の書評をすべてカバーしたわけではないが、ほとんどの書評はおおむね好意的だ。それにも関わらず、なぜわたくしが批判的な意見を持つかという、それはダーコンが上に要約した彼の主張の根拠になっている国々の現実を充分

深く分析していないからだ。例えば、エチオピアやバングラデッシュのエリート・グループとはどんなグループなのか、そのグループ間の社会契約はどのような性格のものでどのようにして形成されたのか、そのようなディテールが欠落している。数多くの国々が出てくるが、その発展段階や成長軌道の描写は皮相的で、その国の持つ歴史的なあるいは地政学的な社会経済構造とその中で動き回る政治的アクターたちの姿は見えてこない。エチオピアのメレス政権の性格、バングラデッシュの政治不在の原因、ナイジェリアの根強い民族抗争、ルワンダの民族紛争と現ポール・カガメ政権の性格、等々重要な問題が掘り下げて議論されていない。

さらにまた、ダーコンによるエリート・グループや社会契約の中身の定義はまさに融通無碍で、ナンデモアリの印象を与える。ある国に本当に発展の社会契約が存在するかどうかを証明するのは困難で、その国が経済発展を遂げていることの実証が証明にならざるを得ない。しかし、そうすると「発展の社会契約が経済発展を動かす。経済発展の成功が発展の社会契約の存在の証明だ」、すなわち「成功が成功の条件」というトートロジー（同義反復）になってしまう。

「ダーコン予想」のチャレンジ

数学の世界で、「予想 (conjecture)」と言うと、真実かも知れないが、まだそうと証明されていない問題のことを言うらしい。例えば、最近あるロシア人数学者によって証明されたポワンカレ予想や、いまだ未解決のリーマン予想などの話題が良く新聞を賑わす。この本の中での主張もまた、開発経済学の世界のいわば「ダーコン予想」のようなもので、本当らしく思えるがそれが本当だと証明、あるいは読者を説得するような分析を伴った証明は、まだまだこれからというのが本当なのでなかろうか。これは本書の大きな欠陥だが、わたくしは個人的にはこの欠落した部分を埋めることが、経済発展や開発を研究しようとする人たち、例えば開発経済学者たちに対する実務家からのチャレンジだと受け止めている。本書に出てくる国々一つ一つについて、それがどのような社会・政治・経済構造を持っていて、その中でどのようなエリート・グループがどのような性格の集団で、どのようなグループ間関係を築いているのかを調べてみるのも一つのアプローチだ。ただしその結果、経済発展の一般論を理論化するのはますます困難になるかも知れない。

いずれにしても、もしダーコン予想によって現実の経済発展の軌跡を正確にたどることが説得的に示されたら、現在下火になっている、個別の国や地域を政治・経済・社会・文化のすべての領域を総体的 (holistic) に捉えて研究する地域研究を復活させる契機になるかも知れない。個別の国の詳細な政治の研究によってダーコンのエリート間社会契約の存在や性格が明らかになり、それが経済発展の行方を決定するからだ。

わたくしにはダーコン予想には、もう一つの隠れた可能性があるように思われる。現在の制度経済学が説くような経済発展の必要条件、すなわち包摂的な政治体制や法の支配

やクリーンな政府が必ずしも経済発展の始動の必要条件でないとすれば、そして最も重要なのがエリート層の発展志向的な社会契約だとすれば、それは現在独裁、汚職、民族紛争、資源の呪い等々に悩まされている多くのサブサハラ・アフリカの国々にとって経済発展のハードルが低くなることを意味する。サブサハラ・アフリカの将来に希望を与えてくれるのだ。

わたくしは、『発展に賭ける』は「証明された研究成果」を示すのではなく「研究のためのアジェンダ設定」を論じている本だと好意的に解釈したい。